

親友の父親に2年かけて身体を開発され、
処女を奪われ親友の隣でイキ狂い、中出しまで墮とされる話

サンプル（一部抜粋）

「いらっしやい、ゆずちゃん。」

爽やかでにこやかな笑顔。整った顔立ち。47歳にしては、あまりにもカッコよく渋い男性…。
それが私の親友・美樹のお父さんだった。

優しくて面倒見がよくて、美樹の自慢のお父さん。
信頼していた。

深夜にあんな風に犯されているとも知らずに…。

「ゆず〜!」

小学生の時から親友、美樹。中学校も高校も大学も全部一緒に、大親友。

「あ、美樹!」

「今週末、またウチに泊まりにこない?」

「え、いいの?先週も遊びに行ったのに。」

「いいのいいの！ママが居なくなつて…パパも寂しいんだと思う。

週末はバーベキューでもやるかつて張り切つてゐるからさ！

お父さん、ゆずの事氣に入つてゐるし…一緒にお酒を飲もうってワクワクしてたよ」

子供の頃から、美樹の家にはよく遊びに行つてゐる。第二の実家のような、そんな關係だ。

美樹が小さい頃は、お母さんも居ただけだな。

数年前に浮氣して出て行つた…らしい。当時は美樹も荒れてたけど、最近はようやく落ち着いてきた感じだった。

私に出来る事はなくて、ただ話を聞いたり遊びに行つたりしたくらいだけど。

そんな關係の美紀に週末誘われ、私は特に何も考えずに即答で了承した。

（中略）

楽しい時間はあつという間に過ぎ、ほろ酔いの状態で私達はソファに座つた。

「お風呂の前にお水を飲んだ方がいいよ。」

おじさんは私と美樹にお水を一杯ずつ、持つてきてくれた。

「さすがお父さん！氣が利く♡」

美樹は酔っぱらつたまま、嬉しそうにコップを口に運び、ごくごくと勢いよく水を飲みこんでいく。

私も目の前に置かれたコップに手を伸ばし、美樹と同じようにごくごくと水を流し込んだ。

これも…いつもと同じだった。

いつも美樹の家でお酒を飲むと、おじさんがお水を出してくれる。

きつと悪酔いしないように、水を出してくれるんだと思う。

そんな大人の気づかいが、ほっこりと心に沁みて嬉しくなる。

「じゃあ順番にお風呂に入っておいで。」

「はい！じゃあ私から入ってくる！」

美樹はお風呂へと去っていく。

なんでもない時間。おじさんと他愛もない話をして、テレビを見て笑い合う。

10分ほど戻って来た美樹と入れ替わるように、私もお風呂に入る。

「バーベキューで汗かいたな。」

小さく独り言を漏らし、身体を念入りに洗う。

だけど秘部を洗おうとした時、一瞬わずかな違和感が頭によぎった。

「…ん？」

泡のついた手をシャワーでゆすぎ、秘部に触れた指先に…信じられないほど糸を引く粘液が絡みつく。

「……嘘、なんで……？」

お酒を飲んで少し体が熱いだけのはずなのに、下半身だけがまるで別の生き物のようにトロトロに濡れ、疼いていた。今日って排卵期とかだっけ…？

いや、違うよね。なんだろう…？

異常に濡れている秘部に首をかしげながらも…まあ、そういう日もあるよね、と軽く流す事にした。

私は何も気付いていなかった。

いや、私の身体は明確に気付いていたのに、それを無視してしまった。

(中略)

……

くちゅっ…ぐちゅっ…じゅるっ…

「はあ…っ、おまんこぬるぬるだね…」

ドクドクと身体が脈打つような感覚。わずかに痙攣する身体…。

「は…あ…」

勝手に声が漏れていく…。

何…？夢？

下半身を…敏感な場所を何か温かいモノに擦られて…

「っ！」

感じたことのない感覚に、思わず身体をビクッと震わせ、目をパチッと開いた。
真っ暗な部屋。斜め上からは美樹の寝息が聞こえてくる。

私にかけられた布団。だけど…股のあたりに誰がいる…!?

慌てて身体を起こそうとしたけれど、手にうまく力が入らない…。

「……あれ。起きた？」

だけどわずかな動きで股の間のナニカはもぞつと動き、掛布団をパサッとめくる。

「…っ！」

暗闇だけ…分かる…。

「おじ…さん…？」

私のパジャマ…下着とズボンがない…。なんで？

月明かりに照らされて、おじさんの唇が妖しく光っている。

「やっぱりあれくらいの量にしたら、起きるよね。

そうだと思った。」

おじさんの小さな声が、低く残酷に響く…。

「なに…して…」

「ん？おまんこ舐めてたんだよ？」

悪びれる様子も、慌てる様子もない。至極当然のこのように紡がれる言葉に、脳が激しい拒絶の警報を鳴らす。

逃げなきゃ、叫ばなきゃ……！

そう思って力を入れようとするのに、指一本すら満足に動かない。

筋肉が完全に弛緩しきっている。

「…や、なんで…!？」

「なんでって…いつもこうしてるから…かな？」

「いつも…？」

「そう。いつも。」

おじさんの調教のおかげかな。軽く舐めただけで、おまんこトロトロになってるよ？」

おじさんの指が私のクリトリスをぬるつと撫でる。

その瞬間、動かないはずの下半身がビクッと跳ね、熱い快感が脳を直接揺さぶった。

「ひ…あつ、あ…嘘…：…っ、やめて…っ」

「嘘じゃないよ。おじさんの指がクリトリスを撫でる度に、くちゅくちゅ聞こえるだろ？」

拒絶したいのに、身体は勝手におじさんの愛撫に反応し、淫らな音が静かな寝室に嫌に響く。その事実が、何よりも恐ろしかった。

(中略)

「ゆずちゃんね。おまんこをぐちゅぐちゅ抉りながら、クリトリスを吸われるのが大好きなんだよ。」

いつも、それで簡単にイっちゃうんだよね。」

クスクスと笑いながら告げられる、私ですらも知らない私の情報。

ぞっとするような悪寒が背筋を駆け抜けた。

いつも？私が…？

そんなの嘘だ、知らない。

でも、今こうして目の前で私の身体を完璧に知り尽くし、思い通りに狂わせているおじさんの手つきを見ると、それが「事実」である可能性が突きつけられ、頭がおかしくなりそうだった。

「もしかして嘘だと思ってる？」

「っ…」

「証明してあげるから、ちゃんと自分の性癖くらい、理解しておくんだよ？」
クスッと意地悪く響く声。

次の瞬間、中に入れられた指がぐちゅぐちゅと動き始め、おじさんの綺麗な唇が私のクリトリ

スへと這う。

そのままクリトリスをじゆるっ…と吸い、熱い口の中で舌がくちゅくちゅと甘く動き始める。

「ひ…ぐ…ぐ、あああつ、や、それ…やだ…あああつ」

おじさんの舌と指が織りなす絶妙なリズムに、脳みそがトロトロと溶かされていく。

思考の糸がプツリと切れ、涙と一緒に甘ったるい吐息が零れ落ちる。

「は…あ、きもちい…っ、イっちゃう、おじさん…っ、やだ…や…っ、あああああつつっ!!」

びくんと激しく身体が跳ね、天井を見つめて涙を流したまま、呆然と甘い息を漏らす。

「ね？簡単にイっちゃったでしょ？」

おじさんの声が…甘く脳内に響く。

斜め上から聞こえる美樹の寝息が…遠く感じる。

「イきたく…ないのに…っ」

「…でもイっちゃったね。」

「…っ、こんなの…変だよ…っ…」

「そう？」

「親友のお父さんなんて、おかしいよ…。美樹にバレたら…」
身体はひくひくと喜んでいる。それは否定しようがない事実だ。

脳が「拒絶しなきゃ」と警報を鳴らしているのに、股の奥はもっとおじさんの指を、もっとな熱い舌を欲しがって熱を持っている。

それでも…残りわずかな理性に私は必死でしがみついていた。

「……美樹に？ ばらすの？」

おじさんの穏やかな表情からは、感情が読み取れない。

「っ……」

ばらしたら、美樹が落ち込むだろうし、私の事もおじさんの事も軽蔑するだろうな…。お母さんが出て行った時の美樹の憔悴具合を知っているのに、やっと立ち直ったのに、また追い詰める事なんて…出来ない。

でも、だからといって、おじさんの指と舌でイキ狂うのも…嫌だ…。

私は必死で働かない頭をフル回転させ、言葉を選ぶ。

「……ここで終わりに…してください…。」

そうしたら、美樹には言わないから…っ

おじさんだって美樹にバレたら困るはず…。その前提の上で、最大の譲歩案を口にした。

ただどおじさんの表情は一切変わらない…。

「………？」

「ゆずちゃん。そんな交渉で辞めてもらえと思ったの？」

「え……？」

「そんな覚悟もないくせに。」

ぐちゅっと私の中で指が動く。

「ひ……う……っ」

「美樹にバラせるならバラしていいよ？出来るからね。」

でもその時は、俺の指と舌でいき狂ったゆずちゃんの姿も、バレると思ってね。」

（親友のお父さんの執拗な調教、連続絶頂の全容は製品版にて）